國學院大學学術情報リポジトリ

杵築の国学者・物集高世の神道論：伊弉諾尊、伊弉冉尊観を中心として

メタデータ	言語: Japanese
	出版者:
	公開日: 2024-10-31
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 神杉, 靖嗣
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002001025

杵築の国学者・物集高世の神道論
――伊弉諾尊、伊弉冉尊観を中心として

神杉靖嗣

はじめに

物集高世は明治初期の大教宣布運動において、宣教使の官員として関わった豊後国杵築藩出身の国学者・歌人である。[1] これまで、高世については言語学的研究の他、奥田恵瑞・秀による評伝、発掘資料の翻刻・集成の他、秋元信英による高世のキリスト教への排除論を中心とする書誌学的・思想史的な研究がある。[2] 奥田恵瑞・秀は主に高世に関する資料の集成、翻刻と評伝の作成作業に関わる業績を上げた。秋元信英による「明治五年、物集高世『妖教六日問考』のキリスト教認識と引用文献」（『國學院大學日本文化研究所紀要』第九十八輯、平成十八年）は書誌学的・思想分析的な点からの詳細な論文であるが、『祆教六日問考』分析の前提として、高世の著作『神道本論注解』[3]と『妖魅論』を通じて神道論の分析もなされている。秋元は同論文で、高世の思想を平田派の系列に連なる天之御中主神を造物主とする思想からの派生とするが、一方で『神道本論注解』の「伊弉諾ノ尊、伊弉冉ノ尊、二柱の皇大御々神、奇シク妙なる神御所為もちて、彼の顕事幽事の、互に爾あるまにまに、既に顕世幽世をあらしめたまへれば」などの部分を引

用し、造化三神を含む天神からの委任を受けた伊弉諾・伊弉冉が果たした役割を重視した点について、篤胤の解釈を前進させたとして、その特徴を見ている。

高世は『神道本論注解』において伊弉諾尊、伊弉冉尊二柱の神について、天地万物をつくりだし、天下の大道としての神道をつくったのみならず、その教えを最初に教える役割も担ったと解釈しており、記紀などの古典に事跡が記載されていないものも含めてこの二神の役割は極めて重いものと考えている。このように高世は平田派の系譜に連なるとされながらも、多神教的な基盤に立つ神々の間の複雑な委任の関係を想定しており、一神教的な傾向は希薄である。『神道本論注解』が書かれたのは一八五〇年の高世が三十三歳のときであり、これが後に玉松操の目に留まり、宣教使の官員に抜擢されたということはこのような神道説が少なくとも大教宣布運動の初期においては、「宣布」すべき教義の一つの候補として受け入られる地盤があったことを意味する。[4]

本論考は、『神道本論注解』を中心として『宣教講本』[5]、『祆教六日間考』[6]を合わせて彼の神観念を分析していくことで、幕末から明治維新期にかけての物集高世の神道論を考察するものである。『神道本論注解』を用いるのは高世が最も詳細に神道論を叙述した文献であることに加え、先述の通り宣教使の官員[7]となるきっかけとなった意味で重要な著作であるからである。また、宣教使の官員となった高世の布教講義を次男の高材が書き留めた『宣教講本』、宣教使時代に記して未定稿に終わった『祆教六日間考』を合わせて分析することで、高世の思想をその伊弉諾・伊弉冉の神観を中心に検討する。激動の時代背景の中で高世の神観念がどのように変化したのか、さらには代表的国学者の伊弉諾・伊弉冉観との異同と影響関係の分析を通じて、高世の神道論解析とその歴史的意義の解明へ向けて歩を進めたい。

一、『神道本論注解』『宣教講本』における伊弉諾尊、伊弉冉尊観

まず初めに、『神道本論注解』[8]の簡単な構成を示した上で、同書の伊弉諾尊、伊弉冉尊観を確認していく。「神道本論注解巻一」の冒頭にある「提要」には、「此の書、有神論、幽顕論、二界論、原道論、神道論と段を分かちて注釈す」とあり、同書が五部構成になっていることがわかる。ここでは五部構成の全てについて見ていき、高世の神道論の核心とも言える伊弉諾・伊弉冉に関する記述で重要性が高いと思われる部分を特に抽出し、その神道論の特性を明確にすることを主眼とする。

伊弉諾尊、伊弉冊尊、二柱の皇大御々神ハ、彼の諸の天神等の事依によりて、此の地のミならず、天をも夜見をもつくり成したまへる（『神道本論注解』「巻四」二界論　第三　二六〇頁、下段八行目～十二行目）

このように、高世は伊弉諾・伊弉冉の二柱が三つの国のうちで葦原中國だけを修理固成したとはせずに、「諸の天神等の事依」を受けた二柱の神が天（高天原）と黄泉國も「つくり成したまへ」たと記している。ここだけを見ても分かるように、高世は記紀二典には記載が見られないことでも、事実であるに違いないと確信した事に関しては敢然と独自の解釈を取る。

心神も魂神も別物にはあらぬを、かく稀をかへていひわけたるハ、いさゝか謂ある也。さるは許古呂ハ其の用をいふ言、太萬之比ハ其の躰をいふ言なり。まづ心神は凝々といふ言の約なり。其は心神は、伊弉諾の皇大御神

の、奇妙なる神御所為を以て、むすび凝し成し出たまへる物なれバ也（同「巻三」有神論　第一　四二五頁、上段十四行目～下段二行目）

彼の幽世に死入らしめたまふにも。其の形こそは朽損はるれ。其の魂神ハ消失ずて。永世にある物になもありける（同「巻五」神道論　第五　三八一頁、上段十三行目～十五行目）

高世は、「心神」・「魂神」を殊更に重要視しており、魂は消滅してしまうという儒者などの説を批判しつつ、その永続性を強調する。その重要な心神を「むすび凝し成し出たまへ」、「魂神」も「奇しく妙なる神大御所為をもて、結び生し」という尊い役割を果たしたのが伊弉諾尊、伊弉冉尊の二柱の神であるとする。

さてこの帝といふハその幽世を領たまふ神なれバ、大国主大神にぞあらむを、帝といふにつけてハ、彼の天の主宰たる、皇天上帝の事と心得るもあるべきが、そは伊邪那岐伊邪那美二柱の皇大御々神の御事にて、ひがことなり（同「巻二」有神論　第一　三六五頁、下段十二行目～十五行目）

天竺の梵天、漢土の上帝は、実に我が伊弉諾尊伊弉冊尊、二柱の皇大御々神を申すなるべき事、右の纂疏の御説にも考へ合せて知らる（同「巻四」二界論　第三　二五一頁、下段十五行目～十八行目）

高世は、同著作においてインドの梵天の教えをすなわち神道であると断言している。そして、「天帝また大梵天王を、

天之御中主尊に配たるはいかゞ」、「平田氏の真柱に、此を二柱の皇産霊尊にあてたるやうにいへるもあたらず」として、天帝あるいは梵天を造化三神のことと考える説や大国主神であるとする説を批判し、インドの梵天や中国の天の主宰たる「皇天上帝」について伊弉諾尊伊弉冊尊の「二柱の皇大御々神」のことであるとしている。すなわち、高世は他国の中心的な神々について実は諾冉二神のことであり、それが「訛伝」したものであると捉えるのである。

顕事幽事ハ、この事をはじめてあらしめたまひし、二柱の皇産霊皇大御々々神の掌り為したまふ事なるが、天夜見地を経営めしめたまふ時に、伊弉諾尊、伊弉冊尊、二柱の皇大御々神に、その産霊の奇大御魂を、わかち授けたまはしての後ハ、彼の伊弉諾尊、伊弉冊尊二柱の皇大御々神なん、此の二事は掌り為したまひける（同「巻三」幽顕論　第二　四三八頁、下段四行目～十一行目）

天夜見地ハ、後に伊弉諾尊、伊弉冊尊、二柱の皇大御々神の、造り堅めたまへるなれば、萬国ミな神の経営にあらざるハなし（同「巻四」二界論　第三　二五〇頁、下段十七行目～二五一頁上段二行目）

高世は、「顕事」「幽事」について、最初二柱の産霊の神が「はじめてあらしめたまひし」ものとしつつ、伊弉諾・伊弉冊の二柱に「天沼矛」を授け、三国の経営を任せた後は諾・冊二神が「掌り為したまひける」ものであるとする。さらに、「天」「夜見」「地」の三国について掌る諾・冊二神は、当然に「地」の中に含まれる世界中のあらゆる国についても「造り堅めたまへる」のであると理解されている。

二柱の皇大御々神の、勤労ミたまひて、天夜見地の三国を修理固成したまへりし御賞として、其の大御子神等に、この三国を分ち領しめたまへるにて、次の本文にもいへるが如く、伊弉諾尊ハ、後に天津加美国の日の少宮に騰り留り坐まして、天津加美世の幽世の事を掌りたまひ、伊弉冊尊は、後に夜見津加美国に下り留り坐まして、夜見津加美世の幽世の事を掌りたまひ（同「巻四」二界論　第三　二六〇頁、上段一行目～九行目）

高世は、伊弉諾・伊弉冊の二柱が「勤労ミたまひて」「天夜見地の三国」を修理固成したことの褒美として、「彼の上に坐ますあまたの大御々神等」は三国を「其の大御子神等」に「分ち領しめたまへる」としており、さらに伊弉諾尊が「天」の「幽世」を治め、伊弉冊尊が「黄泉の國」の「幽世」を治めることを任されているのも修理固成したことへの褒美であると考えている。

天の瓊矛をたまひて、事任たまへりしぞ、即其の御印にはあるべき。此によりて猶考ふるに、皇産霊皇大御々々神は、これより後は、彼の幽顕の二事ハ、此の伊弉諾尊、伊弉冊尊、二柱の皇大御々神にぞゆだねたまひけむ（同「巻四」二界論　第三　二六二頁、下段十五行目～二六三頁、上段二行目）

顕幽の差別は全くわかれし事なれば、其の時より伊弉諾尊、伊弉冊尊、二柱の皇大御々神の、御教諭ありて、我が天皇ハ生人を治りたまふにつきて、伊弉諾皇大御々神の、掟たまへる旨に従ひまして、其の御制にそむく者を罰なひたまひ、大国主皇大御神ハ死霊を治りたまふによりて、伊弉冊尊の掟たまへる旨に従ひまして、其の御掟にたがふ者を罰なひたまふめり（同「巻四」二界論　第三　二八七頁、下段十一行目～十八行目）

高世は、「天の瓊矛をたまひ」た時を二柱の産霊の神が伊弉諾・伊弉冊に幽顕の二事を託した時であるとするが、伊弉諾は「天」の「幽世」とともに三国の「顕事」を掌り、神や人や萬物を生出し、伊弉冊は「黄泉國」の「幽世」とともに三国の「幽事」を掌り、神や人や萬物の死を掌るとする。また、「顕国」と「幽国」の差別を厳しく分けその「御制」を定め、二つの国が「相雑はぬ事」として截然と分けたのも伊弉諾・伊弉冊の二柱であるとしている。

また、葦原中国において天皇が「其の御制にそむく者を罰なひたま」うのも、伊弉諾が最初に定めた掟に従うものとし、黄泉国において大国主神が「其の御掟にたがふ者を罰なひたま」うのも、伊弉冊尊が最初に定めた掟に従うとしており、その掟を制定したものとしての重要性が窺える。

天津彦火瓊々杵尊を、此の地の国の天皇と定めて、天降したまふ事に、古事記、神代紀ともに、伊弉諾尊、伊弉冊尊、二柱の皇大御々神の、御言依の御詔ありけむを、ふつに記されざるハ、例のさかしらの筆ある故なり（同「巻四」二界論　第三　三〇一頁、下段五行目～九行目）

又考ふるに、此の二柱の皇大御々神は、相共に議りたまひて、此の三大世界をばあらしめたまふなれば、人草も生出しめたまふべき事なるをバ、互に知りて坐ますからに、彼の夜見の國の時には、その人草ハいまだ生出しめたまへるにあらねど、後に爾生出しめたまふ（同「巻四」二界論　第三　三一六頁、上段十六行目～下段三行目）

高世は、天孫降臨の際に伊弉諾・伊弉冊による「御言依の御詔」があったに違いないとまで述べており、記紀二典についても誤りがあるとして、「さかしらの筆ある故なり」とたとえ神典であっても、自らの信じる神観念の方が正

しいとして部分的には批判している。また、三大世界のみならず「人草も生出しめたまふ」たのも伊弉諾・伊弉冊の二柱であるとする。すなわち、古典に記載のない人類を産み育んだことも諸・冊二神の重要な働きであるとされているのである。

そもそも道といふ事の、本の起源は、此の本文にいへるが如く、彼の伊弉諾尊、伊弉冊尊、二柱の皇大御々神の、此の天夜見地の三大世界を、つくり成したまひ、神や人や、なにくれの物どもをも、あれ出しめたまへるにつけて、さる物どもの、あるべきやうを爾々と教へ習したまへりしよりの事也。二柱の皇大御々神、この本道の大道を、たてたまひ、教へたまへりしよしの證文は、たしかには神典に見えねども、皇国に道といふ言擧も、又さるかたの教も、既に上古よりありければ、其を以て考ふべし（同「巻五」原道論　第四　三三五頁、下段六行目～十六行目）

高世は、「道」の起源について、そもそも伊弉諾・伊弉冊の二柱が三国を「つくり成したまひ」、さらに神・人・万物を「あれ出しめたまへる」時に、それらに対して「あるべきよう」を教え諭したことに由来していると理解している。また、伊弉諾・伊弉冊の二柱が「道」の根源を作り教え諭したことについて具体的なことは神典に見えなくても、「既に上古より」「道といふ言擧」があることから当然推測できることだと述べている。

このように高世は『神道本論注解』において、伊弉諾・伊弉冊二神の役割を極めて重要かつ広いものであると見ており、古典の叙述がない範囲にもその独自説は及んでいる。つまり、「天夜見地」の三国を修理固成しそれを「顕世」と「幽世」に分けたのも、人類を生み出しそれに永久不滅の「魂神」・「心神」をさずけたのも、そして神道の起源を

つくり教えたのも全て伊弉諾・伊弉冊二神の役割だとするのである。特に天孫降臨について、天津彦火瓊々杵尊への「御言依の御詔」があったとの神観については、天照大御神の極めて重要な事跡についても実は伊弉諾・伊弉冊二神が関わり重要な役割を果たしたのだと考えており、その説は歴史上の国学者・神道家でそのような主張をした者はほとんど皆無に近いと思われるほど大胆な説であると言える。

次に『宣教講本』（上・下）を見ていくことにする。『宣教講本』では伊弉諾・伊弉冊について述べている部分が極めて少なく、またその記述の全てが「上」に集中している。やや冗長になるが、高世の他著作の伊弉諾・伊弉冊論との比較のため、関連する全てを引用する。なお、本論文における引用は『宣教講本』（上・下）（『國學院大學日本文化研究所紀要』（第九十五輯、平成十七年三月）による。

さて魂は前に云たる通り、神の御授けなさるゝ物で、それも先日の講説に委く云る如く、彼皇産霊大神の産霊と云て、奇々妙々な神術を、伊弉諾伊弉冊二柱ノ大神に授給ひしを、此二柱ノ大神より又 天照大御神に授給ひしより此方、天照大御神其産霊の神術を受傳へまして、世界の寓物生成し給ふに仍て、人の魂もむすび成して、それそれに賦了授け給ふでござる（『宣教講本』「上」「人の魂の事」三五一頁、九行目～十三行目）

伊弉諾大神の初て國土を御産なされた時に、「我産る處の國は朝霧のみ薫り満る哉」と詔ひて、吹拂ひ給ふ御息が即風神と成給し如くなる事で、此類の事は猶多いが、皆其事物に思凝り給ふ御心が、即に神と成ので、幸ひ給ふ御魂、奇魂は奇妙なる御魂が各々神と成り給ふので、一神ながら数神とも成、一神にても一神と成給ふ事でござる（同「上」「人の魂の事」三五二頁、十二行目～十五行目）

さて魂は右に云たる如く 天照大御神の奇々妙々なる神術にて、むすび凝し御授なされた物だに因て、身體は死でも腐ても、此魂の消滅ると云ふ事は決てないでござる（同「上」「人の魂の事」三五三頁、九行目～十行目）

『宣教講本』では、高世は伊弉諾伊弉冊二柱の神について彼の他の著作『神道本論注解』、『祆教六日間考』と比べると特に強調はしておらず、言及されている箇所も限られている。他に『宣教講本』では伊弉諾伊弉冊については、伊弉諾尊が軻遇突知神を斬り殺したことに関して、伊弉諾尊が御短慮であるとかの問題ではなく「造化の神の奇々妙々な神慮」が働いて起こった事件であると述べているのが全てである。二柱の「皇産霊大神」より「奇々妙々な神術」を伊弉諾伊弉冊二柱が受け継いだという記述がみられ、それはさらに諾・冊二神から天照大神にも受け継がれていくという構造になっている。この天照が「奇々妙々な神術」を諾・冊二神より受け継ぐということについて『神道本論注解』では具体的な記述は見られず、伊弉諾伊弉冊より天照大神の役割が重視されているかに見える点で、高世の神道観が変遷したととることも可能である。しかし、『宣教講本』の後に成立した『祆教六日間考』と照らし合わせるとそのように簡単には断言できない所なのである。

二、『祆教六日間考』における伊弉諾尊、伊弉冉尊観

秋元信英は、前掲「明治五年、物集高世『妖教六日間考』のキリスト教認識と引用文献」において、高世の神観について平田派に連なる者と認めている。しかし、造物主をはっきり定めず著作によりキーワードとなる語句の定義や使用も違っているとし、その資料批判の甘さと演繹的な結論の出し方[9]、『神道本論注解』と『祆教六日間考』の間の論の転回した部分についても批判を加えており、結論として古典のすべての部分に必ずしも忠実とは言えない平田国

学からの一帰結にすぎないとしている。秋元は同論文において「大教宣布運動史を考察する際には、神道における唯一神ないしは造物主をめぐる解釈が無視できない」、「言うまでもなく、平田篤胤は造化三神の神徳をめぐり『霊能真柱』から前進し続け、ついには天之御中主神が万物造化の神であると認めた。すでに指摘したように、本書は国学史の平田篤胤の系譜に連なる著作と認めたい。本書が「世界の大教」と言い神道の同義語として論じるのは、その系譜につらなる立場からの大教宣布運動の活動であり、造物主をめぐり独自の解釈を前進させようとしたのであった」と述べて、高世の学問を位置づける。

以下、『祆教六日間考』（上・中・下）（未定稿）の内容を具体的に見ていく。特に、伊弉諾尊、伊弉冉尊に言及している重要な部分について抽出する。なお、本論文における引用は國學院大學図書館に貴重図書として所蔵されている『祆教六日間考』（上・中・下）（未定稿）による。

唯一神を殺し給へるは世界の萬生を殲滅せしとは、同日の論に非ず（『祆教六日間考』「中」、「耶和華神洪水を流して世界の生類を殲滅に為す事」、二丁ウ三行目～四行目）

生類の死亡せるは、彼ノ幽顕の差別に因て有る事は、豈彼一言に因て然らんや（同「中」、「耶和華神洪水を流して世界の生類を殲滅に為す事」、二丁ウ六行目～八行目）

高世は、彼が特に重視する伊弉諾尊・伊弉冉尊の二神が神や人を殺したこととキリスト教のゴッド（耶和華神）が人類を殺したことを比較して、伊弉諾尊・伊弉冉尊については深い「御神慮」があってのことであると弁護し、ゴッ

ドについては魔神である証拠であるとして批難している。要するに、伊弉諾が軻遇突神のみを殺したこととキリスト教のゴッドが洪水により全人類を殲滅しようとしたことを比較し、比較対象になる事ではないとして、残忍極まるゴッドは魔神であると断定を加えるのである。また、伊弉冉が一日に千人の人を殺すとの記載については、「幽世」と「顕世」の世界を截然と分けてそれらが相互に交わることがないと制定したことをこのように表現したことであり、殺したという事実だけを捉えて単純に残忍な神であると認識するのは誤りであるとする。

天照大御神。御祖神。伊弉諾伊弉冉二柱の大神の。丕業を受継給ふ。相議りて幽顕の分別の御制令あり。以て神人雑糅する事を許し給はず（略）耶和華神実は天主造物主あらんには。即伊弉諾伊弉冉二柱の大神に當りて。産霊神に當たるとも云ふべけれど、産霊神は、古事記の序文に云へるが如く、造化の首を為給へるなり、天地萬物は伊弉諾伊弉冉、二柱の大神ぞ造為し給へるなり（同「中」、「耶和華神埃及全國の首出ノ者を殺す」、十五丁ウ八行目～十六丁オ六行目）

我皇國ノ如き。上古より伊弉諾伊弉冉二神をば。知らざる者なし。天地を鎔造せし神なるべし。支那に盤古氏と云ひ。印度に梵天王と云ふも。其名称は異なれども。各国各所その名称は存せざることなければ。誰とてか知らざる者あらん（同「中」、「耶和華神、人を信せしむるに、幻術を以て為べき事を、摩西に誨ふ」、十七ウ一行目～五行目）

我伊弉諾伊弉冉。二柱の大神は未嘗て地獄を造り給へると云ふ古傳を聞ず。耶和華神実に地獄を造れるなら

ば。それこそ魔神なる證跡なり（同「中」、「西洋人小児を掠む并人肉を喰む、猶さまざま兇残なる國多きあり」、三十五丁ウ八行目～三十六丁オ二行目）

高世の『祓教六日間考』における伊弉諾尊・伊弉冉尊についての基本的な認識は、重要点について『神道本論注解』とほぼ同じであり、当然ながら古典の叙述がない範囲にその独自説は及んでいる。すなわち、高世は中国の盤古氏やインドの梵天王など他国の中心的な神々を諾冉二神と同一視し、また「天夜見地」の三国を含む天地萬物を「造為し」、さらに三国を「顕世」と「幽世」に分けたのも伊弉諾尊、伊弉冉尊二神の働きであるとしている点で変化は見られない。キリスト教のゴッドが地獄を造ったことと、伊弉諾伊弉冉二神が地獄を造った形跡がないことを比較しゴッドが魔神であることの証拠の一つとしていることはこの著作で初めて言及されていることであるが、『祓教六日間考』の排耶書という性質上当然に出てきた比較論であると言えよう。ただ一つだけ違うところは、伊弉諾伊弉冉のなされた「幽顕の分別の御制令」を天照大御神が受け継がれたと付け加えているところであるが、これも諾・冊二神が三国の「顕世」については御子神に譲り支配の委任をされたということから当然に導かれる論理であると言える。

三、宣長・篤胤の伊弉諾尊、伊弉冉尊観との比較

高世は国学者として平田派の系列に連なる存在であると一応は認められる。当然のことながら、彼がその神道論を構築するにあたって師である篤胤を手本として、それをもとに一歩でも学問を前進させたいと考えるのは当然である。ここでは国学者として王道的存在であり篤胤の師でもある本居宣長と、高世の師である平田篤胤の伊弉諾尊、伊弉冉尊観を見て高世説との異同をはっきりさせ、高世の神道論の学説的位置づけをより明確にすることを目的とする。篤

胤は天之御中主神についての解釈を進展させ造物主としての神格を認めた。一方、伊弉諾尊、伊弉冉尊については他の神々に比較しそれほど重要視していない。古事記の注釈書はさまざま出ているが、最初に篤胤や高世などの国学者に多大な影響を与えたと認められる宣長の伊弉諾尊、伊弉冉尊観について、『古事記伝』[10]の伊弉諾尊、伊弉冉尊についての解釈を通じて見てみる。

伊邪那岐神、伊邪那美神、御名義、書紀ノ口決に、伊弉は誘語といひ、師も、伊邪那比君、伊邪那比女君てふことなりと云れき、【那比の比を省きたるぞ、】信に此ノ二柱ノ神、遘合して國土を生成さむとして、互に誘ひ催し賜へる意、【其事次ノ段に見ゆ、】然もあるべし、君を岐とのみ云る例、明ノ宮ノ段の大御言に、佐邪岐阿藝、又忍熊王の歌に伊奢阿藝、共に【吾君の意なり、】などあるが如し、又女君を切むれは美となるなり、【或説に、岐は比古の倒反、美は比賣の倒反なりといへれど、其はたま〳〵合るにこそあれ、然ることにはあらじ、】又思ふに、此は遘合せむとしたまふ時に、交に伊邪汝と誘ひ賜へる御言を以テ、卽チ御名に負せ奉リしにて、那は汝にもあるべし、【かの伊奢阿藝、又此記萬葉などに、去來子等などある類なり、さて岐と美とは上の意にて、此は御名に稱申せるものなるべし、此レも共に其時の互の御言ともすべけれど、なほ然には非じ、又已レ前に思ひしは、伊邪は誘言、那岐は汝君伊、那美は汝妹伊なり、伊は余と云が如し、繼體紀の歌に、愷那能倭倶吾伊云々、萬葉十二に、家有妹伊云々、續紀ノ詔に、藤原ノ朝臣麻呂等伊云々、又百濟王敬福伊云々、又國王伊云々、なほ多き辭なり、さて岐伊は、岐に伊の韻ある故に、岐とのみ云ヒ、汝妹伊は、爾を省き、毛伊を切むれば美なり（『本居宣長全集』第九巻、一五一頁十五行目～一五二頁五行目）

宣長は、周知のように高皇産霊、神皇産霊神の二柱の働きを重視しており、伊弉諾尊、伊弉冉尊については字義的な解釈をした後、神から命への変名に着目し御言持ちとしての性格に注目しているが、そこには原典に忠実な古典解釈以上のものは見られない。また、『直毘霊』においても、産霊の二柱の神が始めた神業を伊邪那岐神、伊邪那美神の二柱が受け継ぎ天照大神に伝えられたというように中継ぎ的な役割しか与えられていない。これ以上の注目すべき言及は特に見られず、伊弉諾尊、伊弉冉尊に限って言えば高世独自な神観に宣長の影響が強いとは認められないと言えよう。

次に高世の師であり、その神観に最も影響を与えたと考えられる篤胤についてみる。前提として、伊弉諾尊・伊弉冉尊観の前に天之御中主神観を見よう。前掲「明治五年、物集高世『妖教六日間考』のキリスト教認識と引用文献」において、秋元が「よく知られるように平田篤胤は『古事記』を基軸にして、天之御中主神が男でもなく女でもなく、香もなく音もなく始まりも終わりもなく、北極星にいる偉大な神であり、産霊二神と一体に「造化三神」となり、天地を区別した神徳を発揮したと解釈した。平行して高天原と虚空の関係が考察された。それらの観念は一挙に確立したのではなく、『霊能真柱』―『古史成文』―『古史徴』―『古史伝』の順をたどり発達したのであった」と述べるように、説の変遷は見られるものの篤胤は天之御中主神を特に重視し、造物主と認定したと一応は捉えられよう。その成りました所に関しては変遷がある。『古史傳』[11]の「神代上一之巻」の冒頭に「古天地未生之時。於二高天原一有レ神焉。御名天之御中主神」（『新修平田篤胤全集』第一巻、九十一頁）とある。これを『古史成文』[12]の「神代上」の冒頭の「古天地未生之時。於二天御虚空一成坐神之御名。天之御中主神」（同　第一巻、十九頁）と比べると、「天御虚空」が「高天原」に変わっていることがわかる。なお、『古史傳』では「元來高天ノ原ありて、其処に成坐すと云ふには非ず」（同第一巻、九十三頁）としており、造化三神が成りました「天御虚空」が後に高天原となったとしている。つまり、「天

御虚空」から「高天原」に書き改めはしたが、造化三神が最初「天御虚空」に出現したという説は変化していない。つまり、篤胤は「天御虚空」に出現した天之御中主神がそのままずっと其の場所に居てそこが後に高天原になったとする説に行きついたが、これだけ悩んで出現した場所やその後の経緯について解釈を何度も変えるのも天之御中主神を特に重視している証拠である。

それに対して、高世は『神道本論注解』巻三の後段は造化三神を論じ「永世に其の虚空に大坐ましゝなり」（『國學院大學日本文化研究所紀要』第九十二輯、四四五頁）として、巻四では、大空の天之御中主神などの造化三神は三界つまり「天夜地をもむすび出たまえ」た偉大な神々であり、ついで高天原に移動して「事議され、顕世幽世の差別をなされて」「本の虚空に還りのぼ」られたと言う（同上『紀要』、第九十三輯、二四二頁）。それ故に「天之御中主ノ尊と申す御名つきたまへるハ、右の如く天の真中に大坐まして、万の事を議こちたまへりける間の事にて」と断定している（同上、二五四頁）。つまり、高世は「虚空」に出現した天之御中主神が三国を「むすび出たまえ」た後にその高天原に移動し「顕世幽世の差別」などの役割を終えて、また「虚空」に「還のぼ」られてそこに永遠に存在するとしている。天之御中主神について、高世は出現した場所と高天原が同じ場所か否か、出現した後の移動の経緯について篤胤の解釈とは細かい違いが見られるが、最初に出現し「天夜地をもむすび出たまえ」た偉大な神という認識は受け継いでいる。

篤胤は天之御中主神についての解釈を進展させ造物主としての神格を認めた。一方、伊弉諾尊、伊弉冉尊については『古事記』の序文の部分について『古史徵』[13]の「一之巻春　開題記　古傳説の本論一」において、「天之御中主神、高皇産靈神皇産靈神參神の天地を造リ坐し、伊邪那岐伊邪那美二柱神の群品の祖として、國を生み島を生み、神を生み人草をも生立たまへる古事を、産靈大神の詔敎へ傳ヘたまへるに頼て識らるゝと云ヘるにて」（『新修平田篤胤全集』

第五巻、三十頁）と述べ、「人草をも生立たまへる」としている点で伊弉諾尊・伊弉冉尊の役割を古典の記載より拡大しているが、他の神々に比較し特別に重要視しているわけではない[14]。

このように、高世は天之御中主神がどこに成りまして、どこに遷られるか、「虚空」と「高天原」の場所的関係についての解釈で篤胤説を受け継いで整序し、天之御中主神を最初に出現した偉大な神と認定はしているが、葦原中国のみならず「天」「夜見」「地」の三国についての修理固成や「幽顕の差別」の制定など具体的な働きについては伊弉諾尊・伊弉冉尊の二柱がなされたものであるとした。つまり、篤胤は伊弉諾尊・伊弉冉尊の二神については人類を生みだしたということ以外は古典の記述にほぼ忠実な解釈に終始し独自説は見られないが、これに対し高世は諾・冉の二神に関しては自らの学問と神観念に従って独自の解釈を加えており、彼なりに自信を持っていたところであると考えられる。

結び

以上、高世の神道論を『神道本論注解』を中心として見てきた。日本の古典や漢籍などを広く引用しながら議論をすすめているが、高世が考察の結果たどり着いた神観を補強する形で引用されており、『宣教講本』、『祆教六日間考』を含めて学問的な著作というより教化に用いる書という色合いが濃厚であることも事実である。

本稿では、特に伊弉諾尊・伊弉冉尊についての高世の神観念を中心に考察を進めたが、大筋では二神については本居宣長の直接的な影響はあまりないということができる。高世は平田篤胤の説を受け継ぎ、天神造化説のもとに造化三神をこの世の始まる前から永遠に虚空に存在するものとして重視はするが、その果たした具体的な役割は比較的少ないものと考えている。それに対して、伊弉諾尊・伊弉冉尊の二神についてはすでに『神道本論注解』の段階で様々

な役割が賦与されており、そこには神々の階層的な委任の論理がみられる。高世としてはここで篤胤の神観を前進させたという感触があったと思われ、独自の見解も多々見られる。また、天照大神については、「天」の「顕世」を治める神として捉えられているが、そこからの展開を記した叙述は少ない。一方、伊弉諾尊・伊弉冉尊の役割は三つの世界を修理固成し、それぞれの幽界と顕界とその掟を定め、三界と神・人・万物に通じる本源の道を定めたとされ役割が広くかつ極めて重くなっており、またその位置づけに関しても他国の中心的な神を実は諾・冉二神のことであると捉えるように国生み・神生みという役割以上の造物主が果たす役割を持つ神とされている。伊弉諾尊・伊弉冉尊を他の神々と比べその神格的な上位を強調するということはしないが、実際の役割や神徳を述べる段ではこの二神を強調する。『祓教六日間考』を一瞥すると、高世はキリスト教成立以前の時代に他国に存在した衆神教的宗教について好意的であり、それぞれの神々が各々の立場で果たすべき役割をする形を肯定し、特定の一神に造物主としての役割を集中させる宗教について懐疑的である。高世は、結果的に造物主という存在を措定しない。

後の著作『宣教講本』においては、伊弉諾尊・伊弉冉尊二神について叙述は少なく役割もあまり記されずに曖昧になっており、二神の事跡とされた人に魂を与える重大な役割も天照大神がされたこととなっており、説が変化してしまったとの印象を与える。宣教使の官員として「大教」を宣布する立場の高世は自らの学説だけを全面に押し出して教化活動を行うことは難しくなっていたことも考えられるが、はっきりと説が変化したとは確定できない。

しかし、さらに後の著作『祓教六日間考』においては、『神道本論注解』を引き継いで伊弉諾尊・伊弉冉尊二神の役割を強調する叙述が見られ、そこでは彼の伊弉諾尊・伊弉冉尊二神の神観には基本的な点について変化は見られない。付け加えられている点は、伊弉諾尊・伊弉冉尊二神が定めた掟と役割りをそのまま天照大神が引き継いでいるとしている点であるが、『神道本論注解』の記述を論理的に進めれば出てくる論であり、変化とまでは言えない。結論として、

幕末から明治にかけて時代が下ってもその伊弉諾尊・伊弉冉尊二柱の神についての独自説は継続していると認められる。言語学者としては学問的実証性に忠実な高世だが、その神道論については演繹的であり必ずしも古典に忠実ではない平田国学からの一帰結に過ぎないとの批判もある。しかし、激動の時代に宣教使の官員という重責を担い、平田国学に基づく神学を前進させたわかりやすい教義を布教することに努力した生き方と連関して紡ぎだされた神道論として尊重すべきであろう。物集高世の神道論は平田篤胤の神観を基本的に引き継ぎながらも、特に伊弉諾尊・伊弉冉尊に多くの役割を与えたことで神道思想史上でも非常に独特であり、神々のヒエラルキーにおけるそれぞれの役割を措定した上での多神教を基本とした独自説の一つの形であると言えよう。

註

（1）　以下、主に『国学者伝記集成』（「日本教育史資料五」を基にしている）、奥田恵端・秀『物集高世評伝』、物集高世著『神道本論註解』（奥田恵瑞・秀編集・発行）により物集高世の履歴をたどる。高世は文化十四年（一八一七）二月一日、豊後国速見郡杵築に商人物集善右衛門の次男として生まれた。通称丈右衛門、正策、正孝、真風とも称す。号は葎屋（むぐらのや）。商家の次男として杵築藩に生まれる。漢学を藩校学習館教授でもあった儒臣元田百平（竹渓）に、神典・歌道を豊前国企救郡の兄嫁の叔父定村直孝と定村直好に学んだ。

　定村直孝の勧めにより、同門の京都向日神社神官で平田門下の筆頭の一人でもあり大阪における平田派の中心人物でもあった神習舎塾主催者六人部是香の門をたたき、六人部塾の四天王の一人と云われるまでになる。後に大阪に出て塾を開き国学の啓蒙育成に尽力するも、経済的逼迫などを含む諸々の事情により、大阪を後にして杵築の地に帰る。帰省後は高世を慕って藩のみならず、地方からも門人が集った。同時にこの時期には恩師元田竹渓の推薦などもあって慶應四年（一八六八）には宇

佐の皇學館に於いて神典や国学を教授する。同年五月には杵築藩の命により杵築藩の藩校学習館の国学教授となる。明治二年（一八六九）、朝廷より神祇官宣教使を拝命する。明治三年（一八七〇）一月二十七日付で、中央政府の神祇官の宣教使権少博士の官途につき、十人の宣教博士の一人となった。その前に、杵築藩は急遽高世を士族の列に連ねた。また、子の物集高見とともに明治三年六月十一日付で平田銕胤に入門しているので、国学者としては平田派に分類されうるが、平田鐵胤・延胤との直接の交流をしめす資料はみつかっていない。この時期に大教に関する講話会の講師をつとめ、それを次男高材が筆記したのが『宣教講本』である。宮仕えになじめず、一日も早い帰郷をのぞむようになり、元来が世襲神官ではないが明治五年に帰郷し大分県の西寒多神社の宮司などを務める。明治十二年（一八七九）には権少教正に任命されて、この年の五月、地元の若宮八幡宮宮司となり、神官と教導職を兼務する。未発見の書も含むが、著書に『葎屋文集』『支言考』『辞格考』『神道本論注解』『神使論』『妖魅論』『宣教講本』『大祓詞新釈』『歌学新論』『神学百歌』『豊国三十六歌撰』『祆教六日問考』『邪教論』『外教秘書』『奈多八幡宮詳細記』『岩崎八幡宮由来記』などがある。明治十六年（一八八三）二月二日に逝去する。享年六十七。長男の物集高見も国学者、国語学者として著名。

（2）従来においては、彼の人物と業績は安政五年の著作『辞格考』の研究書『辞格考とその研究』（物集高世研究会編・青史出版、平成十三年）などにみられるように国語学者・歌人としての面で研究されてきた。一方で、近年奥田恵瑞・奥田秀『物集高世評伝』（続群書類従完成会、平成十二年）が刊行され、彼の神道論に関わる著作が國學院大學日本文化研究所のプロジェクト「幕末の国学者物集高世の研究」などで主に奥田恵瑞・奥田秀両氏により翻刻されており、『神道本論注解』（『國學院大學日本文化研究所紀要』第九十二輯―第九十三輯、平成十五年―十六年）、『宣教講本』（同紀要第九十五輯、平成十七年三月）、『妖魅論』（同紀要第九十六輯―第九十八輯、平成十七年―十八年）、『神使論』（同紀要第九十九輯、平成十九年三月）などが精力的に翻刻され、またプロジェクト関連で「明治七年、物集高見「道の莠」の書誌とキリスト教認識（秋元信英）」（同紀要第九十一輯、平成十五年三月）、「明治五年、物集高世『妖教六日問考』のキリスト教認識と引用文献（秋元信英）」（同紀要第九十八輯、平成十八年九月）、「物集高世著『神道本論注解』について（奥田恵瑞、奥田秀）」（同紀要第九十一輯、平成十五年三月）、「物集高世関係資料拾遺―主に幻の歌集「帝廼露」を中心にして―（後藤重巳）」（同紀要第九十四輯、平成十六年九月）などの論文も執筆された。

（3）奥田恵瑞・奥田秀「神道本論註解について」（『國學院大學日本文化研究所紀要』第九十一輯、平成十五年三月）には、「『注解』

の第五巻の末文に、著述の経緯が記されていた。即ち、嘉永元年（一八四八）から二年に掛けて『神道本論』をまず書き終え、旧知の讃岐国丸亀藩士小野重英と菅神社祠官菅恕乎の二人に送った。間も無く、『注解』の冒頭にあるような序文が届けられた。又、此の『神道本論』を読んだ人から、もっと詳しい注釈を付けて欲しいとの要望があり、それに応えて嘉永四年（一八五一）の冬から手を染めたが、妻の急逝等、家庭の事情があって延引し、同六年（一八五三）の春までに、四巻を書いた。五巻目は同七年（一八五四）三月に書き終えたとあった」と本論文成立の経緯が記されている。また、『國學院大學日本文化研究所紀要』第九十二輯と第九十三輯に掲載された翻刻の「神道本論注解」が若干手直しされて、奥田恵瑞・奥田秀編集・発行により『神道本論注解』（非売品）として単行本として出版されている。

（4）　大和博幸・秋元信英・奥田恵瑞・奥田　秀〈資料翻刻〉物集高世著『神道本論注解』巻一～三（『國學院大學日本文化研究所紀要』第九十二輯、平成十五年九月）に、「この『神道本論注解』が図らずも岩倉具視公の幕賓国学者の玉松操の目にとまり、一介の杵築藩校教授に過ぎなかった高世が、推新政府の目玉とも言うべき神祇官の十博士の一人として選ばれたのであった。明治四年六月、高世が命を受けて書いた講案に、キリスト教の聖書の様に、海外諸国の人々が読むに耐える神道聖典を作る必要性を述べているが、それは、この『神道本論注解』を踏まえての意見であって、これを読んでいない上司には、高世の意図する所がうまく通ぜず、一体誰がそれを書くのかと、取り上げられずに終わっている」とある。

（5）　『宣教講本』について、前掲『物集高世評伝』には「明治三年（一八七〇）から五年迄の、高世の説教記録。二冊、上五十七丁、下六十六丁、追加十丁。高材筆記。國學院大學図書館所蔵。高世は上京中、二月二日から四月七日までに八回、翌四年も四月から十一月までと、五年の正月十七日までの、都合二十回分を載せている。この中に、諸博士と共に書かされた高世の建言書も載っている」と紹介されている。

（6）　『祓教六日問考』について、前掲『物集高世評伝』には「明治四年（一八七一）、高世五十四歳の書。三冊、上七十一丁・中七十八丁・下八十三丁。自筆。自序あり。國學院大學図書館所蔵。高世は、同僚の宣教権少博士潮見清輔に勧められて、キリスト教批判書を誰にでも理解出来るように、平易な文で纏めた。しかし原稿の出来ぬうちに潮見博士は長崎勤務となり、この原稿は宙に浮いてしまった。本書はエホバの神が天地を造られたと同じ六日間で書き上げたので、六日問考とした。故郷に帰った高世は、これを補足して三巻の書とした。しかし、此の書は未定稿に終わっている」と解説されている。

（7）　明治三年二月の「職員録」によれば、権少宣教使の六人目に「物集高世」と記載がある。朝倉治彦編『明治初期官員録・職

員録集成』第三巻（柏書房、昭和五十七年）、参照。

（8）本論文における引用は『神道本論注解』（『國學院大學日本文化研究所紀要』第九十二輯―第九十三輯、平成十五年―十六年）による。

（9）秋元は同論文で、「彼（高世・筆者註）の手法は各種文献が平準的に操作してある。彼においては史料の信頼性をめぐり等級を与える基礎的作業が不在であった。彼は別著『神道本論注解』四において、状況によっては『神典』に「証文」が検出できない場合であっても想定が成立すると言った（『國學院大學日本文化研究所紀要』第九十三輯、二八一頁）。それは、記紀以前の正史『神字天皇紀』を想定する学風と連関している。」（『國學院大學日本文化研究所紀要』第九十八輯、九十頁、九行目～十二行目）と述べている。

（10）本論文における「古事記伝」の引用は、大野晋編『本居宣長全集』第九巻（筑摩書房、昭和四十三年）による。

（11）『古史傳』の引用はいずれも、『新修平田篤胤全集　第一巻』（名著出版、昭和五二年）による。

（12）『古史成文』の引用はいずれも、『新修平田篤胤全集　第一巻』（名著出版、昭和五二年）による。

（13）『古史徵』の引用は『新修平田篤胤全集　第五巻』（名著出版、昭和五二年）による。

（14）ちなみに大国隆正は、伊邪那岐伊邪耶美について、（大国隆正述・福羽美静記）『古事記聞書』（上・下）の中で、「日輪から傳る稜威と地球かな昇る稜威と組合まして初て此伊邪那岐神伊邪那美命からお形があらわれましたことてござる此伊邪那岐伊邪耶美と称すお名のこゝろハ此間の雛形の出來始じやと心得て宜しうござり升扨此二桂の神から於こりまして男女交接して追々人ふえることでござるがこの伊邪那岐神伊邪那美は人間をお生なされす國をおうみなされ萬物をおうみなされた事でござる」（下巻・六・六丁ウ～七丁ウ）、「世中にありとあるものミな此神の神業に漏ることハござりませぬ」（下巻・六・二十一丁オ）、「伊邪那岐神伊邪那美神ハ即これ天地の御霊でござりまして日輪の御霊が伊邪那岐命、地球のミたまが伊邪那美命、その日輪のミたまと地球のミたまとが豊雲野神の御出世の時にはじめて組合まして、問に人間世界が立と申す順立てこざる」（下巻・八・三十七丁オ～ウ）とのべており、二神について初めて人の形としてあらわれた神であるとしてその「神業」を重要視している。